

＝ 第13号 ＝

Rits
立命館大学

応化会ニュース

編集：立命館大学応化会事務局
編集責任者：香山 彰 朗
〒525-77 滋賀県草津市野路町1916

立命館大学応用化学系事務局
TEL.0775-61-2658

会長就任挨拶

情報化時代によせて

会長 田村 弘三郎

(株京第一科学)



錦秋の候、会員の皆様方には、各界各分野にて益々活躍の事とお慶び申し上げます。併せて日頃は同窓会運営につきましても何かとお支援助、ご協力を賜わり厚くお礼申し上げます。

私ごと、去る六月十八日第五回総会におきまして皆様方のご推薦を頂き引き続き「立命館大学応化会 会長に就任する事になりました。

浅学非才の身ではございますが、この重責をお受けした以上は、微力ではございますが皆様方のご理解の下に、幹事共々同窓会の運営に努力して参りますので、ご協力ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

層越ではございますが、早速恒例により同窓会の運営に關しまして、幾らかの所感と希望の一端を述べさせていただきます。

皆様方には既に高承の事とは存じますが、母校立命館大学理工学部が社会の要請に、自ら学園の拡充と発展を願ひ思い出多い衣笠キャンパスよりびわこ・くさつキャンパスに移転し早いもので一年余りの年月が過ぎました。

緑に囲まれ、自然に恵まれた広大な敷地の中に落ついた研究棟、最先端の研究設備、そして精華の二化を圖つた管理棟、等々は二十一世紀に羽ばたく母校に相応しく逞しい風格を感じさせます。

又、新しい分野の研究・教育の学部として、生物工学科(平成六年)が新設されるなど、益々の発展に限り無い夢を感じます。

この度、生物工学科を含んだ同窓会

を組織化する事で、産業界での交流の場が広くなり、本会の目的である会員相互の理解と親睦を更に広げれるものと確信しております。

本学は、近代化社会の研究機能を備えたキャンパスとして、産業界・官界からその役割への期待が高まっておりますが、この機に大学に足を運んで頂き会員の皆様とのコミュニケーションの場として、学園を大いに利用して頂きたいと存じます。

特に、若い会員の皆様には、今まで以上に同窓会事業にも中心となって活躍して頂くようお願いいたします。

この事が、ひいては学内外にも親しみ易く有益な同窓会の運営にもつながり、また社会的使命を果たすことになると考えます。

「高承の通り、今わが国の経済に突きつけられた課題は多く、バブル崩壊の後遺症で景気が低迷し、解決の糸口が見出せないところにあります。

特に為替レートの乱高下など対策の立てられないまま不透明な状況にあります事は、大いに懸念されるところで

す。

このように経済界は未だ厳しいものがありますが、期待される母校の益々の隆昌発展と会員各位のご健勝を心からお祈り申し上げます。

「立命館大学応化会」の今後益々の発展のために、ことの大小を問わず、ご協力を賜わりたく重ねてお願い申し上げますが、就任のご挨拶と致します。

(三二年卒)

本島健次先生 のご冥福を心からお祈りします



本島健次先生

本島健次先生をしのぶ

橋谷 博

本島健次先生は、一九四四年十二月十八日早朝、水戸の病院で眠るうちに他界されました。七十四歳でした。お元気だった先生が突然脳溢血で倒れたのは九二年月のこと、以来病院で自宅リハビリに努めてこられました。九四年の猛暑で体調をくずされ、数日前に入院されたばかりでした。ここに冥福を祈りつつ、弟子の一人として先生のご業績やお人柄を紹介したいと思います。

☆理想の教師像―立命館大学時代

先生は長野県飯田市の出身で、八高、京大に進まれ、戦争中は大学院特別研究生として、孤島守備隊用の海水脱塩剤の研究に従事しておられました。

敗戦の翌年、立命館大学の前身の立命館専門学校講師に就任され、以来一九五七年まで教鞭をとられました。教育界長野の教員家庭で育った先生はまことに「教育的」でした。卓近な例を挙げてのわかりやすい講義は見事で、「これからは実力(シツリキ)の時代だ。」と学生を励まされました。当時の立命館は施設劣悪、金もなく、担当時間だけは世界一(週四時間)といわれ、ともて研究できる環境ではありませんでした。『に健康、二に開志』をモットーに頑張られました。

☆エリート研究者―日本原子力研究所時代

一九五七年、故木村健二郎先生の要請で、先生は原研に移られました。後に「戦国時代」といわれた草創期の原

研にはつわものが多く、六五年頃の分析化学研究室には四十余名中学位取得者が十五名もあり、学会でも一大勢力でした。核燃料・原子炉材料の分析化学的研究とともに分析業務も遂行せねばならず、研究室長の先生は「腕より始めよ」と先頭に立って新しい課題に取り組まれました。

☆研究者の意地―世界にはばたく研究
出藍の誉れ高い先生は、部長、所長と研究所内の管理職の出世コースを歴任されたに、に我々とは疎遠になりましたが、管理職には前をきされ、七五年頃から再び我々の前に姿を見られるようになりました。いつも資料やデータを入れた封筒を持ち歩かれ、誰かれ構わず情熱をこめてその時々ご自分の研究を語られました。お話には常に化学があり、世界がありました。

☆お交には研究者の執念のようなものが感じられました。原研は五十六歳の先生のため特別研究員制度をつくり、四年後日立製作所は先生を技師長として迎えました。日立は六十四歳で退職されましたが、立命館の研究者魂はなお衰えず、化研協、城北化学協で定年の七十歳の自説を七十五歳に延長し、倒れられるまで実験着を着ておられました。療養中はとせと無念だったでしょう。

☆知恵のある研究者
飯田中学で『昆虫博士』とよばれていた先生は知恵に富んだ人でした。知識を完全に自分のものにしておられたからこそ、耳で得た情報から独創的なアイデアを生み出されたものと思えます。知識偏重、知恵欠乏症時代のいま、

も先生が大学におられたらすばらしい教育をされたでしょう。学生たちをうならせた身近な化学の話やせひまとめるよう何度かお願いしましたが、『世界にはばたく研究』に没頭しておられた晩年の先生は耳を貸してくださりませんでした。知恵とはどんなものかを示していただきたかったのです。残念です。



橋谷 博 (S28年卒)

本島先生の想い出

溝添 明

昨年暮、先生の突然の訃報を受けた時、電話の前で感したことは、「先生がお互気間に、水戸に伺なかつた。」悔恨でした。

立命館で先のお教えを受けた様々な想い出、四十年前、初めて分析化学の講義を受けた時の興奮(先生の学問に対する情熱に裏付けられた名義でした。)その後、原研へ転出される決意を知った時のショック、先生と話し合った末に、「先生が日本の分析化学の世界に飛躍されるのを、教える」として、むろ祝福すべきではないかと納得して、皆で、京都駅までお見送りした時の事等が、先生のお笑顔と重なって、次々と鮮明に頭の中を横切りました。

私達が立命館に学んだ時代は、まだ「戦後」を抜けきれず、学園の内外共に殺伐とした空気に囲まれていたが、少くとも当時の私達は、希望に燃え、貧弱な設備の中で、研究室は活気に満ちていました。

この時代、先生は週に四十時間を越える授業を、昼夜にわたってこなされながら、精力的に研究に取り組み、大きな業績を残されました。

先生が身を持って示された、現実の困難に決して切り拓いて行かぬ姿勢、その後の私の技術者として、企業人生を送る中で、最大の指針となりました。現在も、当面する難問を解決できずに、弱音を吐きくなる時、先生の「あのお笑」を想い出して頑張っております。

パブルの崩壊、オウム事件等々、混沌とした社会情勢の中にある今日、本島先生が示された、単なる知識だけの学問ではなく、科学にたずさわる者としてあるべき道を、身を持って示された教を、後進に伝えることができ、不肖な弟子の勤めであるべく、改めて噛みしめている昨今です。



溝添 明 (S33年卒)

科学技術セミナー

近畿経済の展望と滋賀県の役割 —産学官の交流に対する新理工学部への期待—

滋賀県工業技術センター所長

大 概 眞



一、はじめに
近畿の産業は、全国的にみると、第一次産業のウェイトが0・七九％（一九〇年）と低く、第二次産業が三六・六四％で、平均を上回っている。また、第三次産業は、六一・五七％の生産額をもち、毎年、着実に成長し続けている。

ところで、工業出荷額の一九八七年から一九九三年までの変化をみると、第一図のように阪神地域は、景気の上昇局面（一九八七年～一九八九年）での伸びが低く、また、景気の下降局面（一九九一年～一九九三年）になると低下率が大きくなる。つまり、近畿の大都市を中心とする工業は、競争力が弱くなっている。こうしたことから、近畿では新しい産業や事業をつくったり、中小企業の技術力の上向が他の地域以上に求められている。なかでも、産学官の連携が課題解決の最も有効な手段として熱い期待が寄せられている。

二、経営環境に大きな変化
最近、急激にわが国経済をとりまく環境が変わりつつある。今年の四月以後に大きく変わったものに、次のようなものがある。

（一）円相場の変動
異常とも思われる円高が進み、四月十七日には、一ドル七十九円十五銭をつけ、その後、大蔵省の対外投融資規制緩和や日米の協調介入によって一〇〇円近くまで戻している。最近では、金融機関の倒産などの信用不安が外国

でとりざたされ、円安の一因となっている。

（二）情報化の進展
マルチメディアやインターネットが大へんな勢いで発展してきた。インターネットを使って取引を始めたといった記事が連日のように紙面をにぎわすようになってきた。さらにCATLSが、注目されるようになってきた。

（三）公共投資の内容の変化
従来、公共投資、特に景気刺激のためのもので公共投資と言えば、道路や橋や鉄道と言った土木工業の関係が多かったが、今年度の第一次補正予算から、研究開発費や情報関連を対象に含まれるようになってきた。これは、これから出る第二次補正でも、また、来年度予算にも引き継がれて行く。

（四）企業の社会的責任の拡大
この七月一日からP法が実施され、

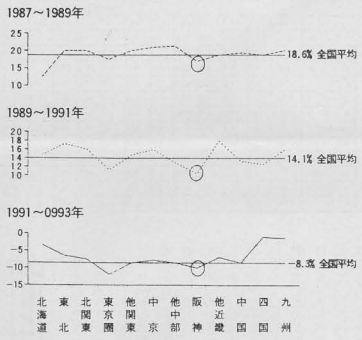
消費者の安全への配慮が強く求められるようになった。国際的にもISO九九〇〇番、製品の品質維持が保障できるものや、一四〇〇番（環境に関する対応が保障できるもの）などやCEマーキング（ヨーロッパへ輸出する機械類の安全性を保障するもの）などが、ますます決まってきた。企業の社会的責任は、大きく広がってきた。

これらの経営環境の変化は、近畿の産業にも大きな影響を与えている。

三、廃業が閉塞をよこす
例えば、円高は、生産拠点の海外進出を加速しているが、大阪府下の製造業をみても第一図のように海外での工場立地が多くなっている。これは、主に大手企業が国際的に展開している生産拠点を一体的に有機的に経営する一方で、国内では生産性の向上を図るために、部品の共通化や点数の削減、海外調達、労働力の削減などを進め、いわゆる為替相場七左とされない経営戦略の反映である。

このため、中小企業にとっては、受注量の減少や価格の引下要請が強くなるほか、一部の下請企業に仕事が集中したり、逆に受注がなくなる企業も出てくる。（中小企業白書、九五年版、一六六～一六八頁）このため、廃業する中小企業が続出し、九一年以来、廃業率が閉塞率を占まわうようになってきている。また、わが国全体の従業員数が史上初めての減り方をし、一企業当りの従業員も七五年～七八年の不況以来の減少となっている。（同白書、一二七～一三三頁）こうして、第一図にみたように、近畿の産業は工業出荷額を

(3) 1995年(平成7年)11月10日



注1：阪神は大阪府と兵庫県合計
注2：4人以上の工場のみ対象
(資料) 通商産業省「工業統計表」より作成
(出典) 近畿通産局「近畿大都市圏製造業活力強化調査報告書」

第1図 地域別工業出荷額の伸び率の変化

減らしていくのである。

四、技術開発に注目
滋賀県においては、県内企業（大企業）四〇社、中小企業四六七社）を対象に行った県の業況調査では、DI（業況が前年と比べて良いとする企業の比率から悪いとする企業の比率を差引いたもの）を求めると、第一表のようにいつも前年同期よりも悪いと考える企業が多い。

第1表 業況判断D・I (「好転」-「悪化」)

業 種	業 界 (前年対比)											増減率 (%)	
	55年	56年	57年	58年	59年	60年	61年	62年	63年	64年	65年		
全 体	▲38.5 (▲48.8)	▲30.5 (▲35.3)	▲27.2 (▲32.1)	▲22.2 (▲27.1)	▲17.2 (▲22.1)	▲12.2 (▲17.1)	▲7.2 (▲12.1)	▲2.2 (▲7.1)	▲1.2 (▲6.1)	▲0.2 (▲5.1)	▲0.2 (▲5.1)	▲0.2 (▲5.1)	▲35.3
大 企 業	▲34.4 (▲44.7)	▲26.4 (▲31.2)	▲23.1 (▲28.0)	▲18.1 (▲23.0)	▲13.1 (▲18.0)	▲8.1 (▲13.0)	▲3.1 (▲8.0)	▲2.1 (▲7.0)	▲1.1 (▲6.0)	▲0.1 (▲5.0)	▲0.1 (▲5.0)	▲0.1 (▲5.0)	▲18.4
中 小 企 業	▲40.6 (▲50.9)	▲34.6 (▲39.4)	▲31.3 (▲36.2)	▲26.3 (▲31.2)	▲21.3 (▲26.2)	▲16.3 (▲21.2)	▲11.3 (▲16.2)	▲6.3 (▲11.2)	▲5.3 (▲10.2)	▲4.3 (▲9.2)	▲3.3 (▲8.2)	▲3.3 (▲8.2)	▲39.0
製 造 業	▲37.7 (▲48.0)	▲29.7 (▲34.5)	▲26.4 (▲31.3)	▲21.4 (▲26.3)	▲16.4 (▲21.3)	▲11.4 (▲16.3)	▲6.4 (▲11.3)	▲5.4 (▲10.3)	▲4.4 (▲9.3)	▲3.4 (▲8.3)	▲2.4 (▲7.3)	▲2.4 (▲7.3)	▲34.2
非製造業	▲46.4 (▲56.7)	▲40.4 (▲45.2)	▲37.1 (▲42.0)	▲32.1 (▲37.0)	▲27.1 (▲32.0)	▲22.1 (▲27.0)	▲17.1 (▲22.0)	▲12.1 (▲17.0)	▲11.1 (▲16.0)	▲10.1 (▲15.0)	▲9.1 (▲14.0)	▲9.1 (▲14.0)	▲35.8

() 内は、1期前における増減率
・全体では、調査まで非常に増やした回復調査であったが、今回は大幅に悪化した。
・大企業は前年対比で大幅に悪くもなっているが、中小企業では16.0ポイント悪化傾向が顕著になっている。
(出典) 滋賀県企業調査アンケート調査結果

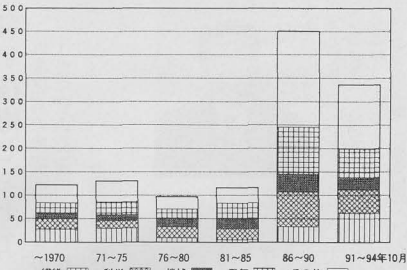
「新しい技術の開発」が多いが、製造業だけをみると「技術の開発」が二・

第二表は「大企業一三三社、中小企業四二二社の考える対応策である。全体としては(8)の「人材育成」や(4)の不況にどう立ち向かうとしているの

(二)と圧倒的に多く、二位の一人材育成(一八・九〇)を大きく引き離している。

これは、先に述べた経営環境の大きな変化を技術開発で乗り切りたいという願望を表わしており、深刻な不況を切り抜けるためには、新しい産業づくりや中小企業の技術力の向上が必要なものとなっている。

幸い、滋賀県では、立命館大学の理工学部が九四年四月にオープンし、先発の麗文大学の理工学部も今年開学した。立命館大学の理工学部は、立命館大学の理工学部の王冠を戴いて、学術の研究拠点が厚くなってきた。しかも、地域との連携に熱心な点をほかりであり、県としても、産学官の連携に全力を挙げて努力をしていきたいと考えている。



対象：大阪府下の製造業の輸出比率10%以上の海外現地法人
(資料)「東洋経済DATAMAX.海外進出企業データベース」より作成
(出典) 近畿通産局「近畿大都市圏製造業活力強化調査報告書」

第2図 大阪府下製造業の海外進出動向

第2表 産業構造の変化に対する対応策(複数回答)

業種	回答数	(単位は%) ()内は複数										
		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)
全 体	(573)	3.1	6.0	2.6	15.0	7.0	7.1	11.7	25.9	13.2	1.6	5.4
大 企 業	(137)	6.0	9.8	2.3	20.3	3.8	9.0	6.8	26.3	10.5	2.3	2.3
中 小 企 業	(442)	2.0	5.7	2.7	13.5	9.0	6.6	13.1	25.8	14.0	1.4	8.3
業 種												
製 造	(5)	0.0	0.0	20.0	20.0	0.0	0.0	20.0	40.0	0.0	0.0	0.0
商 務	(120)	1.7	2.5	0.0	15.0	4.7	0.8	14.2	34.2	19.2	0.0	8.3
機 械	(265)	6.0	12.5	3.7	21.1	7.5	8.6	9.1	18.9	8.7	2.6	3.9
電 気	(3)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	33.3	0.0	33.3
科 学	(15)	0.0	0.0	0.0	6.7	6.7	6.7	6.7	33.3	40.0	0.0	0.0
機 械	(85)	0.0	1.2	1.2	3.5	5.9	21.2	14.1	32.9	11.8	2.4	5.9
電 気	(110)	0.0	0.0	0.0	0.0	36.4	0.0	18.2	18.2	18.2	0.0	9.1
科 学	(60)	0.0	1.7	3.3	10.0	13.3	5.0	11.7	30.0	16.7	0.0	8.3
機 械	(11)	0.0	0.0	0.0	9.1	9.1	18.2	0.0	18.2	18.2	0.0	9.1

- (1) 生産拠点等の海外移転
- (2) 海外からの原料・部品等の調達強化
- (3) 製品等の内製化の引上げ
- (4) 新しい技術の開発
- (5) 新しい事業分野への業種転換
- (6) 取扱商品を生産高品へ特化
- (7) 仕入先の変更等
- (8) 流通コストの削減
- (9) 人材育成
- (10) 情報収集
- (11) その他

応用化学系紹介

本年度着任されました応用化学系の新任教員をご紹介します。

昨年に引き続き、生物工学科の新設に伴う新規の教員として、菊池正和教授が(財)蛋白質研究所から立命館に着任されました。また、塩出十一先生が本年三月三十一日で定年退職されましたので、後任として今村信孝助教授が海洋バイオテクノロジー研究所から移ってこられました。化学科には小堤和彦助教授が筑波大学から赴任されました。さらに新助手制度に伴う人事として、佐原博彦、近藤慎一助手(一三年任期)が新たな戦力として加わりました。

昇格人事に関しましては、昨年度、松田十四夫先生が教授に昇格され、本年度は、岡田豊先生が助教授に、また加藤裕生先生が講師にそれぞれ昇格されております。

いこうまででした

塩出 十一 先生

本年二月末日をもちまして、塩出十一先生が、本学での三十余年にわたる教育、研究活動を終えられ、定年退職されました。長い間の活躍、本学にありがとございました。

略歴 昭和十四年岡山大学農学部卒業。同年、岡山大学大原農業生物研究所副所長。昭和二十六年立命館大学へ。生物化学、化学実験を担当された。



塩出 十一 先生



菊池 正和

新任教員 紹介

〈会員へのひと言〉

り、また九年して本学の新設の生物工学科へ移りました。このようにほぼ一〇年毎に仕事の上での転機が訪れ、その度に気持ち新たにできたことは大変幸せでした。

武田薬品では微生物の代謝を人為的に制御してアミノ酸や抗生物質を生産する蛋白質を遺伝子工学を利用して、よりよい医薬品の創製に努めてきました。蛋白質研究所では蛋白質がどのようにして相手を認識し、かつ蛋白質がどのようにして機能を持った構造を形成するか、という基礎的な研究で世界の研究者との交流を深めてきました。企業においても研究所においても何らかの形で社会へ貢献することを目指して生きてきましたが、本学ではこれまでの経験を生かして学生の教育を通して生命科学の世界は奥が深く、ウィルスからわれわれの人間に至るまで、その生命の仕組みは知るほどに興味をそそられ、何とかしてその謎を解いてそれを利用してやろうと思ふ毎日でした。その醍醐味を一人でも多くの学生が味わい、科学への興味を深めてくれることを願っていますので、よろしくお願ひ申し上げます。

略歴 一九六四年 京都大学農学部農芸化学卒業、一九六六年 京都大学大学院修士課程終了、同年 武田薬品工業株式会社、研究所勤務、一九七七年 同中央研究所主任研究員、この間、米国ウィスコンシン大学薬学部 Research Associate、一九八

(副会長の選出)

第二十三条 副会長は、会員のうちから会長の指名によって選出し、總會の承認を得なければならない。

(常任幹事)

第三十一条 常任幹事は、会長の統括のもとに会務の総括及び業務の執行を補佐する。

(庶務幹事及び会計幹事)

第三十二条 庶務幹事及び会計幹事は、会長の統括のもとに一般事務及び会計事務をそれぞれ担当する。

(年度幹事)

第三十三条 年度幹事は、各卒業年度の各専攻科によって選出する。

(学生幹事)

第三十四条 学生幹事は、在学生との連絡を図り、事業発展を援助する。

(顧問)

第三十五条 顧問は、会長をはじめ会員の諮問に応じるほか、この会の運営に参与する。

(役員任期)

第三十六条 役員任期は三年とする。

ただし、学生幹事は一年とする。

二、補欠又は増員による役員任期は、同様の残任期間とする。

三、役員任期は、妨げないものとする。

第二十九條 会長は、この会を代表し、会務を総括し業務を執行する。

(副会長)

第三十條 副会長は、会長を補佐し、会長が事故あるときは、これを代行

第三十七條 この会の経費は、次の各

号に掲げる収入をもって充てる。

一、正会員の年会費

二、正会員の臨時会費

三、正会員の会合参加費

四、広告料

五、寄付金その他の収入

第四十二條 この会は、必要に応じて

總會で諸規約を制定し、幹事会で諸

規則を設けることができる。

(施行)

第四十三條 この会則は平成七年六月

十八日から実施する。

別表

一	立命館高等工科大学校応用化学科
二	立命館日滿高等工科大学校応用化学科
三	立命館大学専門学部工学科化学工業科
四	立命館大学専門学部理学科化学科
五	立命館専門学校工学科化学工業科
六	立命館専門学校理学科化学科
七	立命館大学短期大学部工科応用化学専攻
八	立命館大学理工学部化学科
九	立命館大学大学院工学研究科応用化学専攻
十	立命館大学大学院理工学研究科応用化学専攻
十一	立命館大学大学院理工学研究科物質理工学専攻、環境社会工学科専攻
十二	立命館大学理工学部生物工学科

第五章 會計

立命館大学応化会則

第一章 総 則

第一条 この会は、立命館大学応化会という。

第二条 この会は、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

第三条 この会則において、「本大学」とは、別表に掲げる大学院、大学及び学校の化学系専攻学科をいう。

第四条 この会は、目的達成のため、次の各号に掲げる事業を行う。

- 一、総 会
- 二、会員名簿を整備し、随時発刊する。
- 三、その他、目的達成に必要な事業

第五条 この会の事務局は、立命館大学理工学部化学科内に置く。

第二章 組 織

第六条 この会の会員は、正会員と特別会員とする。

(正会員)

第七条 正会員は、次の各号に掲げる

者をもって構成する。

- 一、本大学の現在の専任教職員
- 二、本大学の卒業生。この場合において、重複卒業者及び卒業後に本大学の専任教職員になった者は、一人の会員とする。
- 三、本大学四回生以上の在学生
- 四、会員の推薦により、幹事会が承認した者

(特別会員)

第八条 特別会員は、本大学の専任教職員とする。

第三章 機 関

(機関の種類)

第九条 この会は、次の各号に掲げる機関を置く。

- 一、総 会
- 二、幹事会
- 三、常任幹事会

第一節 総会

第十条 総会はこの会の最高議決機関であって、会員をもって構成する。

第十一条 総会には、定期総会と臨時総会とがあつて、定期総会は三年に一回開催し、臨時総会は、会長又は幹事会が必要と認めるとき、随時開催することができる。

(総会の召集)

第十二条 総会の召集を行うには、会長は総会に付議する事項を十五日前に会員に送達しなければならない。

(総会の成立)

第十三条 総会は、出席会員によって成立し、採決は出席会員の過半数の賛成によって効力を有し、可不同意のときは議長が決定する。ただし、会則の改廃は出席会員の三分の二以上の賛成を得なければならない。

(総会の議長)

第十四条 総会の議長は、その都度、構成員のうちから選出する。

第二節 幹事会

(幹事会の構成)

第十五条 幹事会は総会に次ぐ議決機関であつて、会長、副会長及び幹事で構成する。

(幹事会の召集)

第十六条 幹事会の召集を行うには、会長は幹事会に付議する事項を七日前に送達しなければならない。

(幹事会の成立)

第十七条 幹事会は、役員五分の一以上の出席によって成立し、議決は出席者の過半数の賛成によって決定し、可不同意のときは議長が決定する。

(幹事会の議長)

第十八条 幹事会の議長は、その都度、出席会員のうちから選出する。

(幹事会の委任)

第十九条 幹事がやむを得ない理由で幹事会に出席できない場合は、委任状によって他の幹事又は他の会員に委任することができる。ただし、一人で二人以上の委任は受けられない。

第三節 常任幹事会

(常任幹事会)

第二十条 常任幹事会は、この会の執行機関であつて、会長、副会長、常任幹事、庶務幹事及び会計幹事をもって構成する。

第四章 役 員

(役員の種類及び数)

第二十一条 この会は、次の各号に掲げる役員を置く。

- 一、会 長 一名
- 二、副会長 二名
- 三、常任幹事 若干名
- 四、庶務幹事 若干名
- 五、会計幹事 若干名
- 六、年度幹事 各年度から若干名
- 七、会計監査 二名
- 八、会計監査 二名
- 九、顧問 若干名
- 第一節 役員を選出及び委嘱
- (会長の選出)
- 第二十二條 会長は、会員のうちから選出し、幹事会の議を経て総会の承認を得なければならない。

六〇一九九五年 蛋白質工学研究部第三研究部部長、この間、近畿大学薬学部講師、九州大学工学系大学院非常勤講師、京都大学食糧科学研究所非常勤講師、大阪大学医学部客員教授、など歴任、一九九五年四月、本学に着任、農学博士（京都大学）



今村 信孝

本年四月に生物工学科の助教として着任いたしました。生まれも育ちも関東ですが、十数年前に、時期は過ぎたことですが、自然に思われた滋賀に戻ってこれたことを喜んでおります。

これまでは主に医薬、農業などへの応用を狙った、微生物の生産物についての研究を行ってきました。こちらでは微生物の生産物研究の原点に戻り、抗生物質のようなものを微生物が何の目的で作るのか、自然環境中での微生物間の相互作用といった観点から研究を進めてみたいと考えています。キャンパスは琵琶湖を代表とする恵まれた自然の中に立地し、自然環境の生物観察から始める化学を目指すには最適な地であり、また、学生諸君とともに、おおいに研鑽を積みみたいと思っております。

同窓会の皆様には、今後大変お世話

になるかと思いますが、どうぞ宜しくお願ひ申しあげます。

略歴 一九七五年三月、東京工業大学工学部有機材料工学科卒業。一九七七年三月、同大学理工学研究科繊維工学専攻修士課程修了。一九七七年四月、一九七八年二月、旭化成工業㈱。一九八二年三月、東京工業大学総合理工学研究科生命化学専攻博士課程修了。一九八二年四月、一九八八年二月、鈾北里研究所、この間、米国GeneBio Acid, Research Institute客員研究員。一九八九年一月、一九九五年三月、清水建設㈱。この間、鈾海洋バイオテクノロジ研究所所長。一九九五年四月、本学に着任。理学博士



小堤 和彦

本年四月に筑波大学より本学に赴任致しました。一九八五年に職を得てから三回目の移動になります。これまでは溶液中における金属錯体の反応性と金属錯体の構造に関する研究を行ってききましたので、反熱測定やX線回折測定が主な実験手法です。溶液の研究に限らず、物性や構造の研究に放射光はとても重要ですが、本学に放射光が関西地区で初めて導入されます。身近かにある放射光を大いに活用して、

今後には卒研究生と大学院生とともに、これまでよりも研究の幅を広げて行こうと思っております。

関西での生活は初めてですが、これまでも少なからず引越しをしておりますので、気楽に構えております。同窓会の皆様にはお世話になることも多いことと思いますが、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

略歴 一九七九年三月、金沢大学理学部化学科卒業。一九八一年三月同大学院理学研究科化学専攻修士課程修了。一九八四年九月、東京工業大学大学院総合理工学研究科電子化学専攻博士課程修了。一九八五年四月、東京工業大学大学院総合理工学研究科助手。一九八六年四月、岡崎国立共同研究機構分子科学研究所講師。一九八八年四月、筑波大学理学系講師。一九九五年四月、本学に着任。理学博士



佐原 将彦

本年度より立命館大学にお世話になることになりました佐原将彦です。専門は物理化学で、今まで液晶、強誘電体などの物性を中心に研究を行ってききました。現在、有機機能化学研究室に所属しており、主に液晶エラストマーの構造と物性について研究しています。

趣味は、料理で休日などは朝から材料を仕込み始めることもあります。基本的に物を作るのが好きな人間です。いろいろと御面倒をかけると思いますが、よろしくお願ひ致します。

略歴 平成元年、岐阜大学工学研究科修士課程修了。同年、日本ケミコン株式会社入社。平成四年、岐阜大学工学研究科博士後期課程修了。平成七年、岐阜大学工学博士取得。同年、立命館大学理工学部助手として赴任



近藤 慎一

本年度四月より、本学理工学部助手となりました。教員になって一年目ですので、色々不備もございませうが、みなさまのご指導、ご鞭撻のほどをお願いいたします。専門は有機化学ですが、特に生体触媒を用いた不斉合成を中心に研究活動を行ってまいりました。これからは、分野にこだわらず、興味を持って研究活動をいたしたいと思っております。今後とも宜しくお願ひいたします。

略歴 一九九〇年、千葉大学理学部化学科卒業。一九九二年、京都大学理学研究科修士課程修了。一九九五年、京都大学理学研究科博士後期課程修了。

一九九五年四月、本学に着任。理学博士（京都大学）

同窓会ニュース用 原稿の募集について

次号（平成八年十一月発行予定）発行部数約六千部の「会員ページ」、「トピックス」欄の原稿を次の要領で募集しますので、協力を願ひします。

- ① 一件、千〜二千程度
 - ② 「會員のページ」欄は、随想、提案のような内容、「トピックス」欄は製法・技術紹介の内容を求めます。
 - ③ 募集の切は、平成八年七月上旬
- なお、事前に事務局に連絡下さい。
- TEL 〇七七五六一一―二六五八
FAX 〇七七五六一―二六五九



同窓会通信

— 総会
だより —

本年六月十八日(日)午後二時よりBKCキャンパスに於いて、第四回総会が開かれた。田村会長はじめ五九名の会員が出席し、会則、名称の変更や、新役員の出選などが行われた。

藤田幹事の司会で開会し、まず黙禱を行い、過去三年間に逝去された恩師本島先生はじめ三十一名の会員の方々のご冥福をお祈りした。続いて、田村会長の挨拶の後、議長に東氏、副議長に篠原氏を選出し、議事が進められた。



総会での議事内容

一、松田幹事より、前回の総会以降の経過の概要および化学科、生物工学科の二学科からなる応用化学専攻の設立の経緯について報告された。

二、澤村幹事より平成六年度事業報告、岡田幹事より平成六年度決算報告がそれぞれ行われた。市川会計監査の監査報告の後、上記報告が承認された。

三、松田幹事により新学季体制に供たう会則、名称変更の提案説明がなされ、審議の末、別表にあげた通り会則が変更され、また名称も「立命館大学化学科同窓会」から「立命館大学応用化学科同窓会」と改名された。

四、役員の出選方法について幹事会原案を提案する方法で審議を進めることを承認、岩橋役員選考委員長より、幹事会での審議経過、さらに会長、顧問をはじめとする役員各候補者の出選にあたっての出選基準、選出経過などが説明された後、原案が提案された。

質疑の後別表の新役員が選出された。また、引き続き年度幹事の選出が行われた。

五、平成七年度の事業計画と予算案に関する提案説明が澤村、岡田幹事から行われ、質疑の後、これら計画案、予算案を承認した。

最後に新役員、新幹事が一同に紹介され、代表して田村会長から挨拶が述べられた。

総会終了後、BKCキャンパス内のユニオンスクエアに於いて懇親会が開かれ、二時間に亘って新旧の会員が親睦を深めた。



速報

大瀧仁志教授が

紫綬褒章を受賞!!

応用化学系教授、大瀧仁志先生が今年度の紫綬褒章を受賞されました。大瀧先生は93年に分子科学研究所から本学に赴任され、現在、理工研の所長も兼任されています。

立命館学園内に先生の研究主題は「溶液中の金属錯体の構造解析と反応の熱力学」と書かれております。先生は溶液構造の研究にX線解析法を我が国で初めて導入され、特に水和イオンの構造や溶存している結晶として取り出せない錯体の構造に関する研究を行われるとともに、ポテンシオメトリーによる溶液内反応の平衡定数の決定と熱測定による反応エンタルピーおよびエントロピーの決定を行われ、溶液内の反応種と生成種の構造との関

連から反応機構が解明されてきました。例えば、X線解析法による研究を始められた頃、2価の亜鉛イオンは四面体構造であると考えられていましたが、実際は八面体構造であることを明らかにされ、高等学校の教科書をはじめ、多くの専門書の記載が修正されました。最近では世界で初めて反応中間体の構造を直接決定することに成功されました。また、イオン結晶の溶解過程を分子動力学シミュレーションにより研究され、その結果を映像化してビデオに収録されましたが、結晶の溶解という極めて一般的な現象をマイクロレベルで解明された点で国内外の多くの教育者の関心と呼びました。このビデオはNHKや放送大学などで採用され放映されました。これらの業績により先生は今回紫綬褒章を受賞されたわけですが、最近では様々な分野で注目されている超臨界水を対象として研究を行なわれるとともに、立命館大学でも教育研究にますます活躍されており



写真左から二人目

第4回総会に於いて

活躍されており

応化会役員名簿(敬称略)

顧問	杉田嘉一郎 (旧教員)	37年卒	寺田卓二	55年卒	井口晃
	鈴木啓三 (旧教員)	39年卒	藤井博	56年卒	木戸隆宏
	尾池 巖三 (旧教員)	40年卒	山本修三	57年卒	河野宏彰
	吉田 巖三 (27年卒)	41年卒	梶田晋司	58年卒	北河英次
	田村 巖三 (27年卒)	42年卒	天田健治	59年卒	野口剛
	田村弘三郎 (31年卒)	42年卒	加納修	60年卒	古川博一
会長	田村弘三郎 (31年卒)	昭和18年卒	宇佐美博三	昭和27年卒	岩崎弘通
副会長	竹内良夫 (28年卒)	22年卒	清水保孝	28年卒	富田耕一
	谷口吉弘 (40年卒)	25年卒	石原進	29年卒	磯島文雄
常任幹事	岩橋清 (23年卒)	26年卒	山田吉之助	30年卒	山上満
	宇野光造 (25年卒)	23年卒	山田益三	31年卒	元川宏史
	岸要 (25年卒)	24年卒	今達裕治	32年卒	香山彰朗
	香山彰朗 (31年卒)	25年卒	竹内良夫	33年卒	岡本朗
	藤井博 (38年卒)	26年卒	八木永治	33年卒	磯野可喜子
	北尾舒彦 (39年卒)	20年卒	奥安井悦	37年卒	近藤照雄
	東正弘 (41年卒)	22年卒	山本幸男	38年卒	大谷芳幸
	中村尚武 (41年卒)	23年卒	山本徳治	39年卒	秦修
	村上俊男 (45年卒)	25年卒	浅井昭男	40年卒	北尾舒彦
	廣瀬和昭 (50年卒)	26年卒	岸要	41年卒	東田嘉一
	目方康人 (61年卒)	25年卒	九鬼敏隆	42年卒	野田正弘
	田口 肇 (62年卒)	昭和19年卒	林幸男	43年卒	藤原長政
庶務幹事	松田十四夫 (38年卒)	昭和27年卒	岸 要	44年卒	村上昭信
	澤村精治 (49年卒)	28年卒	八木 永治	45年卒	阿部重男
	藤田典久 (51年卒)	29年卒	九鬼敏隆	46年卒	村上昭信
	小島一男 (52年卒)	30年卒	東 龍夫	47年卒	木村俊久
会計幹事	白石晴樹 (47年卒)	30年卒	亀田 章章	48年卒	宮地 淳
	岡田 豊 (54年卒)	31年卒	伊藤 俊昭	49年卒	白石晴樹
	加藤 稔 (62年卒)	32年卒	三間 淳吉	50年卒	小島 賢治
会計監査	市川 延繁 (28年卒)	35年卒	寺井 良平	51年卒	村上秀一
	山上 満 (29年卒)	34年卒	寺井 良平	52年卒	米澤浩一
		34年卒	寺井 良平	53年卒	松本 忠弘
		35年卒	寺井 良平	54年卒	白小 晴樹
		36年卒	寺井 良平	55年卒	白小 晴樹

委員長 香山彰朗(31年卒)

委員 岩橋清(23年卒)
 松田十四夫(38年卒)
 北尾舒彦(39年卒)
 澤村精治(49年卒)
 藤田典久(51年卒)

委員長 竹内良夫(28年卒)

委員 上原正己(34年卒)
 高武(41年卒)
 村上俊男(45年卒)
 白小晴樹(47年卒)
 小島一男(52年卒)
 加藤稔(62年卒)

委員 村上昭信
 阿部重男
 村上昭信
 木村俊久
 宮地 淳
 白石晴樹
 小島 賢治
 村上秀一
 米澤浩一
 松本 忠弘
 白小 晴樹
 白小 晴樹

委員 井口晃
 木戸隆宏
 河野宏彰
 北河英次
 野口剛
 古川博一
 奥村秀三
 早川 英聡
 菊池 康人
 山口 肇
 坂根 正恭
 矢野 博嗣
 大野 隆良
 奥野 茂樹
 小林 政則
 平木 利一
 柴田 典明
 山田 裕之
 杉本 好文
 畑重 勝重
 水野 貴晴
 江盛 貴之
 高島 慎一

平成七年度年会費 平成八年三月三十一日迄 二千元を納入下さいませようお願いします。年会費は、会運営の柱です。全会員の皆様が無断下さいませようお願いします。なお、過年度分の会費納入未納に關係なく、平成七年度分を納入下さいますようお願い申し上げます。

一、平成七年度の年会費の納入への協力をお願い

二、会員名簿(第四号)の発行のお知らせ
 今年十二月月上旬に、平成七年版「応化会役員名簿(第四号)」の発行を予定しております。本版には平成七年三月卒業生分までの名簿が記載されます。注一 年会費の三ヶ月分(今回は平成四、五、六年度分)を完納の会員には、無料配布致します。郵送費はご負担頂きますので、該当する会員は郵送費五百円を添送下さい。送金には同封の振替用紙をご利用下さい。
 注一 上記に該当しない会員には、一冊一千円で販売致します。送金には同封の振替用紙をご利用下さい(郵送費五百円も合わせて送金下さい)。

三、寄付金募金についてのお願い
 会運営を円滑に行うために、運営資金の一部として、寄付金を募っております。寄付金は、一口二千元として何口でも承っております。送金の際は、会費納入振替用紙をご利用下さい。本会の財政見通しは苦しい状態にありますので是非、皆様の積極的なご協力をお願い申し上げます。

四、事務局への連絡について
 会員の住所変更、会費納入、寄付等についてのお問い合わせは、ハガキまたは電話ご連絡下さい。
 事務局の電話は、TEL 〇七五五・一六一一・一六五八 FAX 〇七五五・一六一一・一六五九

(2)同窓会ニュース 編集委員会

平成6年(1994年)度事業報告

I. 諸事業

1) 就職資料集の発行	94年7月中旬
2) 在校生への就職資料集の配布	7月下旬
3) 同窓会ニュース(№12)の発行	10月1日
4) 平成6年3月卒業生名簿作成	11月1日
5) 全会員への通信(1回目) (化学科同窓会BKOCオープンキ ャンパス、第10回科学技術セミナー案内)	11月1日
6) 全会員への通信(2回目) (同窓会ニュース、年会費の請求、 新卒者名簿)	11月7日
7) 化学科同窓会BKOCオープンキャンパス	11月19日
8) 第10回科学技術セミナー	11月19日

II. 諸会議

1) 幹事会	
第1回	7月3日
第2回	11月19日
2) 常任幹事会 第1回	94年7月3日
3) 諸会議	
a) 役員選考委員会	95年3月18日
b) 同窓会ニュース編集委員会	
c) セミナー等運営委員会	

III. 在校生(卒研究生・院生)への援助活動

1) 平成6年度化学科卒業・応用化学専攻修了 記念パーティ	95年3月19日
----------------------------------	----------

平成6年(1994年)度決算報告

一般事業会計

<収入の部>	予算額	執行額
繰越金	63,111-	63,111-
会費	2,500,000-	2,617,000-
寄付金	1,000,000-	354,000-
企業ガイド掲載料	0-	0-
雑収入	100,000-	459-
合計	3,663,111-	3,034,570-

<支出の部>

総会開催費	0-	0-
セミナー等補助金	300,000-	129,236-
会議費	120,000-	79,639-
印刷費	850,000-	553,487-
企業ガイド作成費	300,000-	258,118-
郵送費	1,200,000-	897,891-
人件費	420,000-	130,000-
事務局費	40,000-	23,505-
雑費	100,000-	32,866-
拠出金	0-	0-
在学生の活動援助費	100,000-	70,300-
振込料金手数料	100,000-	36,950-
予備費	133,111-	0-
次年度繰越金		822,578-
合計	3,663,111-	3,034,570-

特別事業会計

<収入の部>		
繰越金	2,179,466-	2,179,466-
拠出金	0-	0-
名簿売上(一般)	100,000-	74,000-
名簿売上(学生)	100,000-	44,000-
名簿荷造送料	25,000-	18,000-
名簿広告掲載料	0-	0-
雑収入	60,000-	32,017-
合計	2,464,466-	2,347,483-

<支出の部>

名簿出版費	0-	0-
名簿荷造送料	20,000-	14,230-
人件費	500,000-	90,000-
事務局費	50,000-	4,635-
予備費	1,894,466-	0-
次年度繰越金		2,238,618-
合計	2,464,466-	2,347,483-

平成7年(1995年)度事業計画

I. 諸事業

1) 全会員への通信(1回目) (第5回総会案内、年会費の請求等)	95年6月5日
2) 第5回総会開催	6月18日
3) 平成7年3月卒業生名簿作成	8月下旬
4) 同窓会ニュース(№13)の発行	8月下旬
5) 全会員への通信(2回目) (同窓会ニュース、第11回科学技術セミナーの案内、 新卒者名簿、年会費の請求等)	10月
6) 在校生への通信(1回目) (同窓会ニュース、新卒者名簿等)	10月
7) 第11回科学技術セミナー	11月
8) 全会員名簿発行	11月

II. 諸会議

1) 第5回総会	95年6月18日
2) 幹事会	
第1回	95年6月10日
第2回	10月
3) 常任幹事会	
第1回	95年5月13日
第2回	10月
4) 諸会議	
a) 同窓会ニュース編集委員会	必要に応じて 年数回
b) セミナー等運営委員会	

III. 在校生(卒研究生・院生)への援助活動

1) 卒業・修了記念パーティ	96年3月
----------------	-------

平成7年度予算

一般事業会計

<収入の部>	予算額
繰越金	822,578-
会費	4,000,000-
寄付金	500,000-
企業ガイド掲載料	0-
雑収入	100,000-
合計	5,422,578-

<支出の部>

総会開催費	300,000-
セミナー等補助金	200,000-
会議費	120,000-
印刷費	1,000,000-
企業ガイド作成費	0-
郵送費	1,500,000-
人件費	200,000-
事務局費	40,000-
雑費	100,000-
拠出金	1,000,000-
在学生の活動援助費	100,000-
振込料金手数料	100,000-
予備費	762,578-
合計	5,422,578-

特別事業会計

<収入の部>	
繰越金	2,238,618-
拠出金	1,000,000-
名簿売上(一般)	250,000-
名簿売上(学生)	150,000-
名簿荷造送料	550,000-
名簿広告掲載料	500,000-
雑収入	60,000-
合計	4,748,618-

<支出の部>

名簿出版費	2,500,000-
名簿荷造送料	500,000-
人件費	500,000-
事務局費	50,000-
予備費	1,198,618-
合計	4,748,618-